

状に日本を覆うようになるためである。十月上旬後半から十一月上旬にかけては、一年中で最も晴れの日が多く、スポーツや行楽のシーズンの最盛期となる。

六 冬

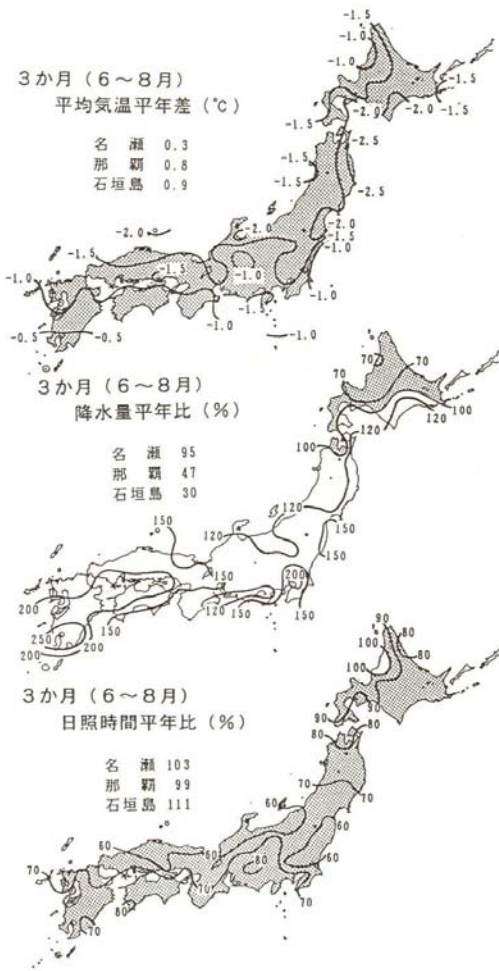
暦の立冬（十一月八日ごろ）に合わせるように、福岡では十一月十二日～十六日ごろ最高気温が大きく下がってくる。この時期になると、時々、西高東低の冬型気圧配置が現れるようになる。

十二月も後半になると冬型の気圧配置の日が多く、下旬には本格的な冬が到来する。福岡では日最低気温の低い値は一月下旬から二月上旬に集中する。これは最も寒さの厳しい時期が月中旬から二月上旬の時期であることを示している。

第四節 平成五年および平成六年夏の異常気象について

一 平成五年夏の異常気象

平成五年（一九九三）の夏は、全国的に低温・日照不足、西日本と東日本の多雨となり、一九五四年（昭和



第20図 平成5年6~8月の気温・降水量・日照時間の平年比 (気象庁 1994)

二十九年)以来の全国的な冷夏となった。これについて全国的な視野から述べる(気象庁、一九九四)。夏の気温平年差、降水量平年比、日照時間平年比の全国分布は第20図に示される。六~八月の平均気温は北日本の太平洋側で平年より二~三℃低く、福岡県では一~一・五℃低かった。特に八月の福岡県北部は二~三℃低い状態であった。降水量は、本州、四国、九州で平年より多く、九州南部では平年の二五〇センチ以上であった。福岡県の六~八月の降水量の平年比は一五〇~二〇〇センチであり、かなり多い状態であった。日照時間は、全国的に平年より少なく、福岡県では平年比六〇~七〇セントである。

第4章 気 候

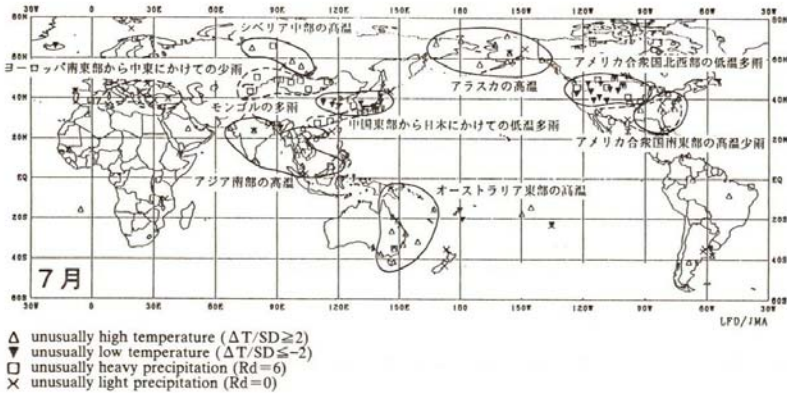
豊津町の六月八月の平均気温は二三・七℃で、平年の二五・二℃に比べて一・五℃低く、特に七月の平均気温は二四・三℃で、平年比二・一℃、八月の平均気温は二四・四℃で、平年比二・八℃、それぞれ低かった。降水量は六月三九二ミリ（平年三二〇・三ミリ）、七月三三二ミリ（平年二九六・九ミリ）、八月三八四ミリ（平年一五八・五ミリ）で、六月八月の全体の降水量は平年比一四三セントであった。日照時間は六月八八・二時間（平年一二五・五時間の七〇セント）、七月七六・九時間（平年一五〇・〇時間の五一セント）、八月九二・八時間（平年一八〇・三時間の五一セント）で、六月八月全体の日照時間は平年比の五七セントである（第3表）。

このように、平成五年の夏は、全国的に気温が低く、日照不足で、かつ北海道を除いて多雨のいわゆる冷夏の状態であった。九州北部の梅雨入りは五月二十九日で、これは平年の六月八日に比べ、一〇日早い。ところがいったん梅雨明けを宣言したものの、結局は「梅雨明けの日」を特定しなかった。平成五年の異常気象は、ただ日本だけの現象ではなく、世

第3表 豊津の平成5年と6年の気温・降水量・日照時間の比較

	気 温 (℃)									降 水 量 (ミリ)			日 照 時 間 (時間)		
	平 均			最 高			最 低			平成5	平成6	平 年	平成5	平成6	平 年
	平成5	平成6	平 年	平成5	平成6	平 年	平成5	平成6	平 年						
1月	5.8	5.1	4.8	9.4	9.1	9.1	2.4	1.0	0.4	71	50	74.8	68.8	120.0	100.8
2月	6.8	5.8	5.3	11.2	9.5	9.7	1.7	1.8	0.8	42	102	91.0	127.9	115.9	101.0
3月	7.7	7.4	8.3	11.9	11.9	13.3	3.1	2.6	3.2	102	72	122.1	143.1	176.6	134.1
4月	13.6	14.7	13.4	18.7	18.8	18.6	8.0	10.5	8.3	150	238	164.5	199.2	164.2	149.4
5月	17.7	19.2	17.9	22.0	23.6	23.0	13.0	14.3	12.7	109	122	172.0	120.5	166.7	166.2
6月	22.3	21.9	22.0	25.7	25.6	26.3	19.2	18.1	17.8	392	230	320.3	88.2	112.9	125.5
7月	24.3	29.0	26.4	27.1	33.6	30.1	21.9	24.7	22.6	332	31	296.9	76.9	271.2	150.0
8月	24.4	28.4	27.2	27.5	32.0	31.3	21.8	22.8	23.1	384	19	158.5	92.8	258.1	180.3
9月	21.6	-	23.2	25.2	-	27.5	18.1	-	18.9	259	-	190.5	124.4	-	131.1
10月	16.4	-	17.3	20.9	-	22.6	11.8	-	12.1	91	-	98.3	175.6	-	147.3
11月	12.8	-	12.0	16.3	-	17.1	9.1	-	7.0	155	-	75.7	87.4	-	116.9
12月	7.0	-	7.0	11.4	-	11.8	2.4	-	2.1	65	-	56.5	133.4	-	100.8
年	15.0	-	15.4	18.9	-	20.0	11.0	-	10.8	2152	-	1821.1	1438.2	-	1603.4

平成6年は8月まで。



第21図 1993年7月の世界における異常天候発生地域の分布 (気象庁 1994)

界の各地で異常な状態が続いた。例えば日本から中国南部にかけての地域では平年比一八〇パーセント以上の降水量がみられ、この地域で顕著な多雨となった。一方、この多雨域の北側の中国北部および南側の中国の南シナ海沿岸と台湾付近では少雨傾向になっている。更に、アメリカ合衆国のミシシッピ川流域では、七月にアイオワ州、カンザス州などで平年の二・五〜七倍に達する記録的な大雨となり、ミシシッピ川、ミズーリ川をはじめ約一〇〇の河川が氾濫し、中西部の広い範囲で大規模な洪水に見舞われた。この洪水のため、四〇人以上の死者がでたほか、家屋や農作物の被害は一〇〇億ドルを超えると報じられた(第21図)。

日本における平成五年の冷夏・長雨は、偏西風が分流してシベリア東部でプロッキング高気圧が発生したこと、亜熱帯高気圧が南に偏ったことによると考えられている。すなわち前者はオホーツク海高気圧の発達、後者は太平洋高気圧の日本付近への張り出しの弱さであり、これらはエルニーニョ現象に伴い、太平洋熱帯域の対流活動活発域が東に移動することで、西太平

洋熱帯域での対流活動が不活発となり、盛夏期の太平洋高気圧の日本付近への張り出しの弱さを引き起こしたのである（気象庁、一九九四）。それは地球全体の大気の流れを変化させ、そのため世界の各地で異常な気象現象が現れたと考えることを可能にする。

二 平成六年夏の異常気象

平成六年（一九九四）の九州北部の梅雨期間は、福岡管区気象台によると、六月七日から六月三十日にかけての二四日間、これは平年の四〇日間より一七日も少ない。この期間の降水量は、福岡で一五〇・五^{ミリ}メートルで、平年値の三三^{センチ}メートルである。これは昭和十四年（一九三九）の九一・八^{ミリ}メートルに次ぐ少なさである。昭和五十三年は七月三日に梅雨が明け、昭和二十六年以降最も暑い夏になった。そのため、水不足が深刻化し、福岡県の干ばつによる被害は甚大であった。

平成六年の福岡市の六月一日～八月三十一日の三か月間の真夏日は六四日、降水量は二〇一^{ミリ}メートルである。降水量は平年（六七九・七^{ミリ}メートル）の三割に満たない。明治二十三年（一八九〇）の観測開始以来最少である。八月の平均気温は平年より二・二℃高い二九・八℃で、史上最高である。福岡市は九月十一日に最高気温が二九・八℃になり、七月二十七日から四六日続いた真夏日から解放された。これは太平洋高気圧に覆われていた九州地方が、十一日までの寒冷前線の南下に伴い、中国大陸北部に中心のある冷たい気団の移動性高気圧が張り出してきたためである。福岡市では、八月十五日に福岡管区気象台の観測史上最高の三七・七℃を